

論文

「adj+ なってくる」と副詞とのかかわり

梁 玥¹

On the Collocation of “adj+nattekuru” with Adverbs

Yue LIANG¹

Abstract

There are many kinds of meanings and usages of the compound verb “tekuru”, in daily conversation and written language. In research studies, the “v+tekuru” structure is more notable, yet the research on the structure of “adj+nattekuru” is rare. The paper explores the relevance and allocation rules of “adj+nattekuru” and adverbs from the perspective of semantics and syntax. On the basis of the research using focus, the concept of scope is added, and the following conclusions are drawn: The structure of “adj+nattekuru” expresses the change of process, and often collocates with the adverbs expressing the progress status. As time goes on, the internal changes of things gradually appear and develop. The structure of “adj+nattekuru” is often used with the degree adverbs. In assumption conditional sentences, whether the degree of “adj+nattekuru” in the preceding is met, is a condition for the consequent. The collocation of “adj+nattekuru” with the adverbs of progress time expresses the repetition of situation change; while collocated with the modal verbs, it expresses the time to start or realize something.

キーワード フォーカス 作用域 変化の過程 変化の程度
Keywords: focus, scope, change of process, change of degree

1. はじめに

補助動詞の「てくる」には様々な意味・用法があり、日常会話や文章語としてよく使われる。従来の研究では、「V+てくる」のような構造が問題視されているが、形容詞の連用形を受けて「adj+ なってくる」のような構造をなす形式に関する研究はほとんどみられない。

本稿は、形容詞の連用形を受ける「なってくる」を「adj+ なってくる」のように書き記し、その共起制限や構文的分布に焦点を当てて、意味論や統語論の観点から「adj+ なってくる」と副詞とのかかわりあいについてルールを示すことを目的とする。

2. 先行研究の問題点と本稿の代案

前述したように、形容詞の連用形と「なってくる」によって構成された「adj+ なってくる」の意味・機能を研究対象とするものは管見の限り見当たらない。しかし、「V+てくる」構造に関する研究は数多くあり、例えば、

寺村秀夫 (1984: 157) では「V+てくる」を「V-V」のように二つに分けて、それによって構成された文の構造について二つの述語が存在すると主張し、どちらが「主たる述語」であるかということに焦点をあてて分析がなされている。以下では寺村秀夫 (1984: 157) をそのまま引用する。

(1) 毎朝会社へ歩いてくる

(2) 学校へは自転車に乗ってきます

のような結びつきでは、「歩いてそれからくる」のではなく、「歩いて」が「どういう来かたでくるのか」ということを表している、という点で、「くる」が主たる述語、「～て」がそれを副詞的に（「徒歩で」「自転車で」などと同じ機能で）限定・修飾しているという、従一主の関係で結びついたものになっている。

寺村秀夫 (1984: 157) は例 (1) (2) の述部のような結び

¹ 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程

The International University of Kagoshima Graduate School Intercultural Studies Doctor Program, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan
2018年5月25日受付, 2018年7月20日採録

つきを、v-V (主が大文字、従が小文字) のように表記し、小文字のvに対し大文字のVが「主たる述語」であるとされている。

寺村秀夫 (1984: 157) は恐らくフォーカスの観点から例(1)(2)における「歩いてくる」「乗ってくる」の意味構造をとらえていると考えられる。確かに、例(1)(2)における「歩いてくる」「乗ってくる」の意味構造について考える場合、フォーカスの観点を欠かせてはならない。しかし、フォーカスという観点は主観的なものであり、必ずしも客観性が保証されるとは限らない。

寺村秀夫 (1984) の指摘に対して、本稿では作用域 (scope) という観点も取り入れる。そうすることによって、文法性判断の客観性が保証されるからである。つまり、例(1)(2)の述部については、述語の作用域の観点から考えれば、伝達すべき情報内容のポイントが補助動詞としての「くる」にあるとも考えられるが、本動詞としての「乗る」にあるとも考えられる。さらに、説明を加えれば、文における述語の作用域は話し手のフォーカスに左右され、フォーカスが違えば、作用域も変わる可能性がある。当然のことながら、作用域の違いは伝達すべき情報内容のあり方を左右するのである。

このような見解の妥当性は例(2)を見ても明らかである。つまり、伝達すべき情報内容のポイントの違いによって述語の作用域が流動的である。そのため、述語の「乗ってくる」が「学校」という領域に意味を及ぼしていると解釈しても、「自転車」という領域に意味を及ぼしていると解釈してもかまわないのである。

寺村秀夫 (1984: 157) はもっぱら空間的特徴に主眼を置き、時間的特徴には触れていない。しかし、「てくる」の意味特徴を考える場合、アスペクトの観点も必要不可欠である。鈴木基伸 (2012: 50, 51) では「てくる」の時間性が取り上げられ、「てくる」の時間的特徴について次のように述べている。

したがって、テクルのみによって捉えられる核事態は、程度性は有するものの進展性を有さないと言える。

(中略)

テクルは核事態に進展性がなくても程度性があればそこを標示できることがわかる。

鈴木基伸 (2012) が言う「核事態」はフォーカスのことを指しているのだろう。しかし、「程度性は有するも

のの進展性を有さない」という指摘は事実と合わない。つまり、そのようなルールではすべての「adj+なってくる」構造について合理的に説明することができない。このような見解の妥当性は以下の例(3)と例(4)によって裏付けられる。

(3)発射音が鼓膜を強く刺戟し、いささか頭が痛くなってくる。それでも構わず射撃を加えた。(書籍/9 文学 テロリストハンター 豪華客船の戦い 柘植久慶 角川春樹事務所 2005)

(4)強制されないでする勉強は、だんだん面白くなってくるものです。(書籍/3 社会科学 中学生の自宅学習法 内藤勝之 産心社 2003)

例(3)の伝達すべき情報内容のポイントは「痛み」が強くない段階から強い段階へ進展する過程にあるのではなく、一定の強さに到達したことにあると考えられる。つまり、「過程」よりも「程度」が表現のポイントであるため、程度副詞の「いささか」の修飾を受けているのである。しかし、進展様態型の副詞¹⁾と共に起すれば、「進展性を有する」ことになる。以下の(3')は「進展性」を有するものとしてとらえられる。

(3')発射音が鼓膜を強く刺戟し、だんだん頭が痛くなってくる。それでも構わず射撃を加えた。

例(3)の「痛くなってくる」には鈴木基伸 (2012: 50, 51) が言う「程度性」が含まれていると同時に、「進展性」も含まれていると考えられる。つまり、述語の表す伝達すべき情報内容のポイントが副詞の「だんだん」の修飾を受けることによって、変化の過程を表すことに傾いてしまうのである。

表現のポイントが「程度」にあるか「進展」にあるかということについて、逆の観点からみるのが可能である。例(4)では副詞の「だんだん」の生起によって、「強制されないでする勉強」が面白くない状態から面白い状態へと面白い状態へと変化したことを表している。ただし、表現のフォーカスが「変化の程度」にあると認められた場合、例(4)のように述語の修飾語が「相当」で置き換えることが可能である。

(4)強制されないでする勉強は、(相当)面白くなってくるものです²⁾。

例(4)に示すように、表現のフォーカスが変化の「程度」であれば、「相当面白くなってくる」のような修飾関係が成り立ち、表現のフォーカスが変化の「過程」であれば、「だんだん面白くなってくる」のような修飾関係が成り立つ。つまり、両者がともに成り立つ原因は鈴

木基伸 (2012: 50, 51) がいう述部の「進展性」を有し、「程度性」も有することに求められる。このことから、鈴木基伸 (2012: 50, 51) の指摘については、再考する必要があるように思われる。

以上のような問題意識をもって、本稿は表現のフォーカスと作用域の観点を取り入れて、「adj+ になってくる」といわれる進展様態型の副詞、および程度副詞とのかかわりあいを視野に入れて「adj+ になってくる」による述語文の表す変化の「過程」と変化の「程度」を考察する。さらに、もう一つの現象を見逃してはならない。それは、「adj+ になってくる」が述語として機能する場合の時間性の問題である。つまり、「adj+ になってくる」が時間性を帯びている以上、そのアスペクト的特徴も視野に入れなければならない。

以下第3節では、「adj+ になってくる」と進展様態型の副詞との共起制限に焦点をあてて、変化の過程を表す場合の「adj+ になってくる」の構文的分布や使用条件を明らかにし、第4節では程度副詞との共起関係に焦点を当てて、変化の程度を表す場合の「adj+ になってくる」の構文的分布や使用条件を浮き彫りにする。第5節では「adj+ になってくる」と進展様態型の副詞、程度副詞以外の副詞とのかかわりあいについて考察する。第6節では、まとめを行う。

3. 「adj+ になってくる」と進展様態型の副詞とのかかわり

「てくる」は出現の過程、変化の過程³⁾、またはある時点までの継続や過程（動作・作用の始まり）といった意味を表す。しかし、「adj+ になってくる」のような構造が形成されると、変化の進展状況も表しうる。コーパスを分析したところ、「adj+ になってくる」が進展様態型の副詞と共起しやすいことに気付いた。具体的に言えば、事態が進展するとともに、その内実である変化が漸次的に拡大していくことを表すのである。

フォーカスする事柄の違いによって、事態の変化状況はさらに変化の過程を表す「adj+ になってくる」と変化の程度を表す「adj+ になってくる」のように分けて考えられる。ただし、「adj+ になってくる」が「過程」を表すのか、または「程度」を表すのかについて考える場合は副詞の役割を無視してはならない。というのは、副詞との共起によって「adj+ になってくる」の意味特徴がいつそう鮮明になるからである。そのような変化の過程を表す「adj+ になってくる」と副詞とのかかわりは以下の例文によって

裏付けられる。

(5)「なにも、こんなときに、マージャンをしなくたってええのに。」しだいに強くなってくる風に、おばさんは、不安をかんじているようすだった。(書籍/分類なし あらしとたたかったねこのチビ 間瀬なおかた ポプラ社 1989)

(6)別れのときがやってきた。あたりがだんだん明るくなってくる。するとロットバルトがあらわれ、娘たちを湖のほうに追いたてる。(書籍/芸術・美術 志鳥栄八郎のオーケストラ名曲大全 志鳥栄八郎 音楽之友社 1994)

(7)それに比べて、作業ができにくい子たちの表情はだんだん暗くなってくる。教室の中に明暗が生まれ、授業時間中に作業が終わらない子どもが続出した。(書籍/3 社会科学 勉強ができない子の指導法 高学年 吉川廣二: TOSS 鳥根各サークル代表 明治図書出版 2004)

(8)瞳子は、右手が徐々にあたたかくなってくるのを感じた。重ねた手が熱を帯びてくる。(書籍/9 文学 風恋記 六道慧 富士見書房 1991)

仁田義雄 (2002) では「次第に」「だんだん」「ますます」のような副詞が進展様態型の副詞として位置づけられている。本稿もそのような位置づけを踏襲する。例 (5) における「adj+ になってくる」については進展様態型の副詞の「次第に」の修飾を受けて、風が強くない状態から強い状態へと変化している間に、「おばさんの不安もだんだん強まった」と解釈することができる。

さらに、述部のアスペクト的特徴を分析すれば、主節の中の述語の「かんじている」は持続を表し、従属節の中の「風が強くなってくる」も変化の過程を表していることが誰の目にも明らかである。つまり、主節と従属節の時間性が一致しているのである。

また例 (6) における「adj+ になってくる」についても進展様態型の副詞「だんだん」の修飾を受けて、あたりは明るくない状況から明るい状況へと変化し、そのような変化が持続し、さらに展開していくという意味を表すものとしてとらえられる。

ただし、変化の過程を表すといっても、「adj+ になってくる」の表す事柄に対して、主観の加工を加えるか否かによって二つの解釈が可能である。例えば、例 (6) と同様に、例 (7) における「adj+ になってくる」も進展様態型の副詞「だんだん」の修飾を受けているにもかかわらず、両者について同様に解釈してはならない。つまり、例 (6)

における「adj+ になってくる」は主観の加工を加えないのに対して、例(7)における「adj+ になってくる」は主観の加工を加えていると思われる。具体的にいえば、例(7)における「adj+ になってくる」は作業ができにくい子たちの表情の変化過程を描写的に描き出しているの、主観の加工を加えない例(6)との間に若干のずれがあると認めなければならない。いうまでもなく、例(6)も例(7)も程度性が含まれているが、それが表現のポイントではない。文環境からみて、話者のフォーカスするところが変化の過程にあるからだと考えられる。

例(8)の述部の「あたたかくなってくる」は瞳子の右手に触るときの感覚を表す。暖かくない体温からだんだん暖かい体温に変わるといことが表現のフォーカスであろう。そのような変化の過程において時間性の観点からみれば持続性が含まれるかもしれない。そのため、進展様態型の副詞の「徐々に」と共起すれば、臨場感が感じられるのである。

例(5)(6)(7)(8)における「adj+ になってくる」は「少し」「相当」「かなり」といった程度副詞の修飾を受けることが可能か否かについて、4名の日本語母語話者に聞き取り調査をしたところ、3名の方から不自然であるという回答が得られた。以下の例(5)(6)(7)(8)はその裏付けである。

(5)*「なにも、こんなときに、マージャンをしなくたってええのに。少し(相当)強くなってくる風に、おばさんは、不安をかんじているようすだった。

(6)*別れのときがやってきた。あたりが少し(相当)明るくなってくる。するとロットバルトがあらわれ、娘たちを湖のほうに追いたてる。

(7)*それに比べて、作業ができにくい子たちの表情は少し(相当)暗くなってくる。教室の中に明暗が生まれ、授業時間中に作業が終わらない子どもが続出した。

(8)*瞳子は、右手が少し(相当)あたたかくなってくるのを感じた。重ねた手が熱を帯びてくる。

例(5)～(8)における「adj+ になってくる」は程度副詞と共起しにくい。その原因は表現のフォーカスが変化の過程にあることに求められる。例(5)(6)(7)のような状態の変化を表す「adj+ になってくる」にしても、例(8)のような感覚の変化を表す「adj+ になってくる」にしても、過程性のある事柄を表していると考えられる。そのような変化の過程性こそ、話し手の描写的に描き出そうとするポイントであろう。

さらにもう一つ、例(3)～(8)における副詞の作用域は「adj+ になってくる」の「adj」「なる」「くる」のどれかにかかわるのではなく、「adj+ になってくる」全体にかかわっているのである。このように、先行研究で示された理論の枠組みでは十分に説明することができない問題が作用域という観点を取り入れることによって、うまく説明することができるのである。

「adj+ になってくる」は「変化の程度」を表すか「変化の過程」を表すかということは副詞の意味素性に左右されるほかに、「adj+ になってくる」自身の意味にも左右される。

(9)しかし逆に、年をとっても収入は増えないし、体もきつくなってくる。年功序列で賃金が上がらないだけでなく、退職金もなければ厚生年金もない。(書籍/3 社会科学 岡塊老人 三田誠広 新潮社 2004)

(10)車の往来も夕方近くから激しくなってくる。(書籍/9 文学 「萩原朔太郎」殺人事件 草川隆 祥伝社 1996)

例(9)(10)における「adj+ になってくる」は副詞の修飾を受けていないにも関わらず、変化の過程を表すものとしても、変化の程度を表すものとしても解釈することが可能である。二つの解釈が可能となる原因は「adj+ になってくる」に内在した意味特徴ににあると言える。つまり、「きつい」「激しい」という形容詞自身には「程度がはなはだしい」という意味が含まれ、「きつくなる」「激しくなる」という状態は瞬間に実現できるものではなく、ある期間内の進行・変化を伴うものである。

二つの解釈が可能になる原因は述語の作用域にあると言える。例(9)を例に取ってみると、述語の「きつくなってくる」は前件の「年をとっても」の働きかけによって過程性を帯びるようになると解釈することが可能になり、そのような働きかけがなければ、過程性は有しない。ただし、前件の働きかけがあってもなくても「きつくなる」自身には程度が含まれていることには変わりがない。

例(10)の「激しくなってくる」についても、同様な解釈が可能である。つまり、述語が前置の「夕方近くから」というフレーズの働きかけによって、過程性を帯びるようになり、その働きかけがなければ、過程性を表さない。「激しくなってくる」自身には程度性が含まれているのである。

そのような意味特徴から、例(9)(10)のような文にお

ける「adj+ になってくる」は進展様態型の副詞「だんだん」や「次第に」の修飾を受けてもかまわない。当然のことながら、程度の意味が内在しているがゆえ、程度副詞ともなじむ関係にある。そのため、例(9)(10)のような文における「adj+ になってくる」は「少し」や「相当」のような程度副詞の修飾を受けることが可能である。

(9)しかし逆に、年をとっても収入は増えないし、体もだんだん(次第に)きつくなってくる。年功序列で賃金が上がらないだけでなく、退職金もなければ厚生年金もない。

(9')しかし逆に、年をとっても収入は増えないし、体も少し(相当)きつくなってくる。年功序列で賃金が上がらないだけでなく、退職金もなければ厚生年金もない。

(10)車の往来も夕方近くからだんだん(次第に)激しくなってくる。

(10')車の往来も夕方近くから少し(相当)激しくなってくる。

例(9')(10')と例(9)(10)に示すように、変化の過程や変化の程度を内在した「adj+ になってくる」はその自身の意味特徴から進展様態型の副詞の「しだいに」「だんだん」「徐々に」などとなじむ関係にあるほかに、「少し」「かなり」「相当」といった程度副詞ともなじむ関係にある。

次は「adj+ になってくる」の時間性をみる。第二言語習得の立場からみれば、「adj+ になってきた」「adj+ になってきている」「adj+ になってきていた」のような表現があると思われがちであるが、コーパスを調べた結果、「adj+ になってきている」や「adj+ になってきていた」の例文が数少ないことが明らかになった。それと対照的に、「adj+ になってきた」がよく用いられるようである。

4. 「adj+ になってくる」と程度副詞とのかかわり

「adj+ になってくる」は進展様態型の副詞と共起するほか、程度副詞とも共起する。第3節において変化の過程を表す「adj+ になってくる」と副詞とのかかわりを述べたが、本節では変化の程度を表す「adj+ になってくる」と副詞とのかかわりについて述べる。

変化の程度を表す「adj+ になってくる」は「少し」「非常に」「十分」といった程度副詞と共起するのが普通である。ただし、話し手のフォーカスが変化の過程にある「adj+ になってくる」と違って、変化の程度を表す「adj+ になってくる」は条件節に用いられることが多い。下記の

例(11)(12)(13)(14)では、「adj+ になってくる」が程度副詞の修飾を受けて条件節を構成し、主節に情報を加えるのである。

(11)五月初め、気温が十分高くなってこころ、冬の間硬くなった土を耕し、一面に水を張る。(新聞/地方紙 神戸新聞 朝刊 神戸新聞社 2004/5/27)

(12)幸福の科学という団体が、現在のように非常に大きくなってくと、総裁である私には少し不本意なところもあります。(書籍/哲学 ユートピア創造論 人類の新たな希望 大川隆法 幸福の科学経典部 1997)

(13)もう少し暖かくなってくと、春コート未満の、軽量羽織りものが役立ちます。注目は、シャツワンピースの前を開け、羽織りものとして取り入れるファッション。(朝日新聞 朝刊 子育て 020 2017/05/06)

(14)六合目で無念の走行停止 上り坂が少しきつくなってくと、どこかがこげているような臭いが出した。(雑誌/総合/レジャー/趣味 ラジコンマガジン(第25巻第10号, 通巻312号) 八重洲出版 2002)

例(11)~(14)における「adj+ になってくる」は程度副詞の「十分」「非常に」「もう少し」「少し」の修飾を受けているので、述語の表す程度性が表現のフォーカスとなると認められる。ただし、例(11)~(14)のような文環境においては、「adj+ になってくる」が副詞としての「非常に」「もう少し」「少し」の修飾限定も受けているため、変化の程度も主節の成立条件となるのである。さらに詳しく述べれば、例(11)における「気温」が「十分な程度」に到達することが主節の表す「土を耕し、水を張る」という事柄の成立条件となるのである。

例(12)(13)(14)についても、同様に解釈することができる。つまり、例(12)(13)(14)の述部の「おおきくなってくる」「暖かくなってくる」「きつくなってくる」は程度副詞の「もう少し」「非常に」「少し」との共起によって、後件の表す事柄がそのような程度を満たさないと、成立しにくいという意味を表しているとして解釈される。そのように解釈できるのは変化の程度に焦点があてられているからである。例(11)(12)(13)(14)では程度副詞の作用域が「adj+ になってくる」の全体に関わっていると考えられる。

しかし、例(11)(12)(13)(14)のような「adj+ になってくる」は進展性を表す副詞「だんだん」の修飾を受けると、

不自然な表現になる。

- (11)* 五月初め、気温がだんだん高くなってくるころ、冬の間硬くなった土を耕し、一面に水を張る。
- (12)* 幸福の科学という団体が、現在のようにだんだん大きくなってくると、総裁である私には少し不本意なところもあります。
- (13)* だんだん暖かくなってくると、春コート未満の、軽量羽織りものが役立ちます。注目は、シャツワンピースの前を開け、羽織りものとして取り入れるファッション。
- (14)* 六合目で無念の走行停止 上り坂がだんだんきつくなってくると、どこかがこげているような臭いがし出した。⁶⁾

「adj+ なる」が進展性を表す副詞と共起するか、程度を表す副詞と共起するか、副詞の意味素性の制限を受けるほかに、文環境の制限を受けなければならない。例(11)のような文環境における「高くなってくる」が例(11)のように、「だんだん」と共起すると、程度性が消え失せて、進展性がフォーカスされるようになる。そのため、後節の成立条件が成り立たなくなる。つまり、例(11)のような文環境では主節の意味特徴の縛りを受けて、「だんだん」や「次第に」などの進展様態型の副詞が排除されるのである。例(12')(13')(14')についても同様な解釈が可能であろう。

母語話者に聞き取り調査をしたところ、「(フライパンが)あつくなると、自動的に火が消えます」のような文環境では程度副詞が許容され、「(フライパンが)とてもあつくなると、自動的に火が消えます」のような修飾関係が成り立つが、「(フライパンが)だんだんあつくなると、自動的に火が消えます」のような修飾関係が成り立たないという答えが得られた。これは例(11)(12)(13)(14)のような文環境では、進展様態型の副詞が排除されることを意味しているのである。つまり、前節が後節の成立前提となる条件下では、進展様態型の副詞は生起できないのである。

変化の過程を表す「adj+ なる」と同じように、変化の程度を表す「adj+ なる」も「adj+ なる」のような形で過去・完了の事態を表すことがある。

- (15)Hも、「やっぱり、そうだよなあ」と思った。そう思いながら、ちよっと怖くなってきた。(書籍/9 文学 少年H 下巻 妹尾河童 講談社 1997)
- (16)近ごろは、この羽根を含め道具類を手に入れるのがとても難しくなってきたということです。(広

報紙/東北地方/福島県 広報あいづみさと 2008年04号 福島県大沼郡会津美里町 2008)

例(15)における「怖くなってきた」は程度副詞の「ちよっと」の修飾を受けているので、感情変化の度合いを表していると思われる。例(16)の述語も程度副詞の「とても」の修飾を受けているので、状態変化の度合いを表していると思われる。ただし、例(15)(16)の述語の表す事態は過去のことであり、アスペクト的には完了の事態である。

5. 「adj+ なる」とほかの副詞とのかかわり

第3節では、フォーカスという立場から、「adj+ なる」といわれる進展様態型の副詞とのかかわりあいについて分析を行い、第4節では、「adj+ なる」といわれる程度副詞とのかかわりあいを考察した。本節では「adj+ なる」と進展様態型の副詞と程度副詞以外の副詞とのかかわりあいについて焦点を当てて考察する。

「日々」「日一日」のような副用語は進展様態を表すものではなく、程度を表すものでもない。そのような意味特徴を有する副詞はいわゆる「進展時間型副詞」⁷⁾と呼ばれている。また、「急に」「急速に」「ようやく」「やっと」のような、いわゆる起動への時間量⁸⁾を表す副詞について、本稿では「急に」「急速に」が起動への時間量を表すものとして認め、「ようやく」「やっと」が実現・成立の手間や時間の長さを表すものとして認める。ただし、「ようやく」「やっと」は期待感を込めた意味も含まれていることを見逃してはならない。

- (17)目つきも険しく私への当たりがきつくなってきた。そしてその度合いが日々きつくなってきた。所長が私を嫌い始めたのが解かったのである。(書籍/9 文学 煙男 入山一平 文芸社 2005)
- (18)長い都市生活のせいか、美しく静かな故郷への親しみが日一日と深くなってきた。(書籍/3 社会科学 日本語教師が見た中国 井沢宣子 三一書房 1996)

例(17)(18)における「adj+ なる」は過去のことや完成したことを描写的に描き出しているものである。述部の「adj+ なる」は「日々」「日一日」のような、いわゆる進展時間型副詞と共起しているので、事態が何度も現れることを表すと思われる。ただし、例(17)における「adj+ なる」は毎回出会ったときの感覚の度合いを表すのであり、例(18)の中の「adj+ なる」はいわゆる進展時間型副用語の「日一日」を伴うことによって、「故郷への親しみ」の度合いを表すの

である。

さらに、「adj+ になってくる」は「急に」や「急速に」のような様態を表す副詞の修飾も受けられる。

(19)陽が翳ると、冷えが急に厳しくなってくる。(書籍/文学 釈迦の女 澤田ふじ子 幻冬舎 2004)

(20)上空を見回すと、攻撃機は急速に大きくなってくるところだった。すぐにも射撃態勢に入りそうだ。(書籍/文学 天界に幸多からんことを 斉藤英一朗 朝日ソノラマ 1987)

(21)「食事がすめば帰ると思うんですが」電話を切ると、浦野は急に腹立たしくなってきた。自分だけが、取り残され無視されている。(書籍/文学 葬った首 清水一行 徳間書店 2005)

(22)「行ってらっしゃい。」を言わなかったから、急に悲しくなってきた。朝食を終えて自分の部屋にもどったら、ランドセルの下に手紙が置いてあった。(教科書/国語/小 国語 六上 創造 宮地裕 光村図書出版株式会社 2006)

例(19)(20)(21)(22)における「adj+ になってくる」は「急に」「急速に」といった副詞と意味関係を結んでいる。これらの副詞は「厳しくなってくる」「大きくなっていく」「腹立たしくなってきた」「悲しくなってきた」といったフレーズに前置することによって起動への時間量を表すことになる。

ただし、例(19)～(22)の述語には事態の前触れがなく突然発生するという時間的特徴を持っている。具体的に言えば、例(19)の述語の表す寒さの変わり方や例(20)の述語の表す飛行機の進み方や例(21)(22)の述語の表す情緒の起こり方が前触れなく生じるものとしてとらえられる。また、「adj+ になってきた」は「ようやく」や「やっと」のような実現・成立の時間や時間の長さを表す副詞の修飾を受けることが可能である。

(23)そうしたきびしい冬が過ぎて、ようやく暖かくなってきた。学生の心にも活力がよみがえり、元気が出てのびのびしてきます。(書籍/3 社会科学紺碧要塞の国際論「紺碧の艦隊」の読み方4 荒巻義雄 徳間書店 1994)

(24)(単調なりハビリメニューから) やっと面白くなってきた感じ」と、ボールがけれるところまで回復していることを明かした。(新聞/ブロック紙 中日新聞 中日新聞社2002/5/2)

「ようやく」や「やっと」は期待感を込めた意味を表すものである。例(23)における「暖かくなってきた」

は「ようやく」を伴うことによって、天気が寒い状況から暖かい状況に少しずつ変化し、それがありがたく実現できたという意味を表すことになる。例(24)における「面白くなってきた」は「やっと」の修飾を受けているので、期待した状況が現実になったという意味合いを帯びていると解釈される。

また、例(19)(20)(21)(22)における「急に」「急速に」と例(23)(24)における「ようやく」「やっと」の時間的特徴については同様に解釈してはならない。いわば例(19)(20)(21)(22)における「急に」「急速に」と例(23)(24)における「ようやく」「やっと」の表す所要時間は対立していると認めなければならない。

さらに、作用域の観点からみれば、例(19)～(24)においても「adj+ になってくる」の全体が述語として副詞の修飾を受けているのである。

6. まとめ

以上、先行研究のフォーカスという観点を踏まえて、さらに作用域という観点を取り入れて、「adj+ になってくる」といわれる進展様態型の副詞、および程度副詞、さらに進展時間型副詞や起動への時間量を表す副詞とのかかわりあいを考察した。副詞の修飾を受けていない「adj+ になってくる」は変化の過程を表すものとしても、変化の程度を表すものとしても解釈することが可能であるが、副詞の修飾的意味を受けた場合、変化の過程を表したり、変化の程度を表したり、変化のあり方を表したりするのである。分析の結果は次のようにまとめられる。

- ①変化の過程を表す「adj+ になってくる」は進展様態型の副詞「次第に」「だんだん」「徐々に」などと共起した場合、フォーカスが変化の過程に当てられ、時間の進展とともに、事態の内実である変化が漸次的に拡大していくことを表す。話し手のフォーカスが変化の過程にある場合の進展様態型の副詞は程度副詞で置き換えることが難しい。
- ②変化の程度を表す「adj+ になってくる」は程度副詞「十分」「少し」「非常に」「相当」などと共起した場合、フォーカスが変化の程度にある。その程度が満足できるかどうかは後件の成り立つ条件となる。フォーカスが変化の程度にあり、しかも、仮定的条件を表す複文が構成された場合の程度副詞は、進展様態型の副詞で置き換えることができない。
- ③「adj+ になってくる」は「日々」「日一日」のような

進展時間型副詞と共起する場合、事態変化の反復を表し、「急に」「急速に」のような副詞の修飾を受ける場合、起動への時間量を表し、「ようやく」「やっと」のような副詞の修飾を受ける場合、実現・成立の時間や時間の長さを表す。ただし、「ようやく」「やっと」のような副詞には話し手の期待感も込められているのである。

注

- 1) 仁田義雄 (2002: 241) 〈進展様態型〉は、時間の展開に従って、事態が進展していき、その進展とともに、事態の内実である変化が漸次的に拡大していくことを表しているものである。変化のあり方という点において、様態の副詞的でもある。また、変化の程度性の拡大という点において、程度量の副詞的でもある。これには、「次第に、次第次第に、だんだん(と)、徐々に、おいおい(と/に)、漸次、…」 「いよいよ、ますます、どんどん、少しずつ…」 などがある。前者は変化の進展性を表し、後者は変化の程度性拡大に関わっている。
- 2) 例(4)における「(相当)面白くなってくるものです」の文法性判断については、4名の日本語母語話者に聞き取り調査をしたところ、1名から不自然であるという回答が得られた。
- 3) 吉川武時 (1976) ではテクルが出現の過程、変化の過程、ある時点までの継続、過程(動作・作用のはじまり)を表し、テイクが消めつの過程、変化の過程、ある時点からの継続を表すとされている。日本語教育学会 (1982) においてもこれとほぼ同じように説明されている。詳しくは『日本語教育事典』370ページを参照されたい。
- 4) 例(9)における「(相当)疑わしくなってくる」の文法性判断については、4名の日本語母語話者に聞き取り調査をしたところ、3名から不自然であるという回答が得られた。
- 5) 例(12')における「(相当)暗くなってくる」の文法性判断については、4名の日本語母語話者に聞き取り調査をしたところ、3名から不自然であるという回答がえられた。
- 6) 例(18')(19')(20')(21')の合理性判断については、3名の日本語母語話者に聞き取り調査をしたところ、「どちらも使える」という判断を出すのが1名しかいない、2名が置き換えられないと判断した。
- 7) 仁田義雄 (2002: 244) 〈進展時間性〉とは、漸次的進展性を持つ事態が展開していく、その時間的あり方を差し出したものである。こちらの方が、時間関係の副詞としての性格を色濃く有している。これには、「年々、年々歳々、日々、日々刻々と、日毎に、年毎に、日ましに、年とともに、刻々と、刻一刻と、…」 などがある。
- 8) 仁田義雄 (2002: 246) では「急に」「急速に」「やっと」「ようやく」のような副詞について「起動への時間量」を表すものとして位置づけられている。

文献

- 内山 潤 (2011) 「補助動詞「テクル」「テイク」のAspectについて」金城学院大学論集、人文科学編 / 金城学院大学論集委員会 編 7 (2): 1~13
- 鈴木基伸 (2012) 「変化的事象を捉えるテクル・テイクはそれぞれ何を表すか: 程度性・進展性という概念を用いて」 Nagoya linguistics / 名古屋言語研究会 編名古屋: 名古屋言語研究会6: 43-54
- 戦 慶勝 (2016) 『中国語と日本語における目的表現の対照研究』東京: 白帝社
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京: くろしお出版社
- 日本語教育学会 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店 1982
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』東京: くろしお出版
- 中谷健太郎 (2008) 「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」レキシコンフォーラム 特集: 複合動詞と複雑述語 東京: ひつじ書房
- 山本裕子 (2007) 〈主観性〉の指標としての「~テイク」「~テクル」人文学部研究論集 / 中部大学人文学部 編 (17) 2007.1 67~81
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のAspect研究」金田一春彦編『日本語動詞のAspect』東京: むぎ書房
- 梁 珮 (2017) 「現代中国語における“adj+ 下去” “adj+ 起来”の意味と時間性について」鹿児島国際大学大学院学術論集 第9集, 83~93
- 渡辺誠治 (2001) 「ていく / てくる」のAspectに関する覚書 活水論文集, 日本文学科編 / 活水論文集出版委員会 編, 長崎: 活水女子大学・短期大学, 50~42
- 渡辺誠治 (2002) 「「テイク/テクル」の分類をめぐって」活水論文集, 現代日本文化学科編 / 図書・学術活動委員会 編, 長崎: 活水女子大学, 102~84